

小学校教員養成課程学生の意識調査

—体育科の実技授業を中心として—

（1983. 7. 14受理）

麓 信義*・小山 秀哉*

Questionnaire to students of training course for elementary school teachers —mainly as to physical exercise classes—

Nobuyoshi Fumoto & Shuya Oyama

子供の発達初期においては、知能と運動能力の発達は深く関連しており、病気等で十分な身体運動が行えないと一時的な精神発達の遅滞が生じることは、よく言われることである。また、言語能力の十分発達していない段階において、子供は、動作を繰り返し行うことによって様々な概念を獲得して行くことがピアジェによって明らかにされてきている⁽²⁾。

生理学の方面からは、神経系の発達は成長のごく早い時期にそのピークがあるとされ（スキヤモンの発育曲線）、小学生の間に様々な運動を体験させ、神経系の発達を促すことが必要であると言われてきている⁽³⁾。運動を好んで行う人間、いわゆるスポーツマンには、情緒の安定した外向的な望ましい性格特性がある、という研究や、運動遊びが心理的に好ましい影響を与えるという研究があることと結びつけて考えると、小学校期は様々な運動能力を開発させるための大切な時期であり、そこで開発された能力は、一生を通しての財産となると考えられる。

さらに、近年は、身体の動き、いわゆる大筋運動を用いて、算数、数学から物理学、はては経済学のような社会科学の概念までも教えて行こうとする試みもなされている⁽⁴⁾。

このように、身体運動は、子供にとって重要な活動であり、身体の教育、すなわち、体育は小学校における重要な教科である。

身体を実際に動かすことの重要性は、体育に限らず音楽や図画工作（図工）についてもいえることであり、そのことは、小学校教諭免許状の授与にあたって、これらの3教科のうち2教科以上について、それぞれ2単位以上を取得することが定められていることとも無関係ではないように思われる。

このように考えると、これらの教科の実技の習得と、小学生にとっての実技の意味づけは、小学校教員になる場合、必要不可欠なものとなるであろう。

それでは、その小学校教員を養成する大学のカリキュラムはどうなっているであろうか。昭和53年に日本教育大学協会が行った調査によると、ある教科の授業を多くとり、その教科について深い研修を積むとともに、他の小学校教科全般を浅く広く学習する、いわゆるピーク制の制度をとっている大学が、51大学（北海道教育大学は5つに教える）中、48校であった。

本学も、以前は、この制度を採用していたが、昭和54年の入学生から、制度が変更になった。ピーク制の長所短所は、上記調査の報告書でも議論されている。ここではその是非には触れないが、この改正で、それまで音楽・図工・体育の3教科（以下、実技3教科と称する）とも実技単位それぞれ2単位必修であったものが、免許法にある通りの2教科選択必修になった。学生にとっては負担減であり、教える側にとっても、200人近くの学生を相手にする授業から、若干の学生減となり、負担減とはなかった。

しかし、ピアジェの言う具体的操作期にあたる小学校教育の現場からみると、この改正が免許法の考え方をそのまま踏襲したものとしても、適切であったかどうかは問題である。

* 保健体育科教室

そこで本研究においては、小学校課程の学生の意識調査を、体育実技科目に対する意見を中心として行った。主な調査対象は、上記制度変更後一期生の昭和54年4月入学の小学校教員養成課程（小学校課程）の学生である。本学部小学校課程の体育実技科目は、小学専門体育Ⅰ（小専体育Ⅰ）と、同Ⅱ、それぞれ1単位よりなり、体操と器械運動・サッカー・水泳（Ⅰ）、バスケットボール・ダンス・スキー（Ⅱ）を主として教えている。これらは、 $\frac{1}{3}$ 単位ずつ当該教官が授業を担当し、3種目すべてに合格しないと合計1単位として認定されない。そして、ダンスとスキーを除いてテスト課題があり、基準に達しないと、授業に出席しただけでは単位が取得できないことになっている。たとえば、水泳の場合、30m泳げること、となっている。これらの基準は、各種目の理想的最低限の目安に対して、現実の学生の能力や、練習環境を考慮して経験的に各教官が定めているものである。十分練習を積めば、教員として最低限の身体的資質を持っている学生にとっては、不可能な基準ではなく、真面目に練習した学生は単位を修得できる。水泳の場合、日本赤十字社の「『水上安全』のてびき」によると、2種目で100m以上泳げることが安全に泳げる基準であるとしており、指導者になる場合も、泳げる距離が長い方が望ましいと考えられるが、学生の9割以上が25m泳げるような大学の場合と異り、25m以上泳げる者が女子の28%、男子の49%しかない（54年生の場合）本学部小学校課程の学生に対しては、現実的な基準と考えられる。

調査の主題は、これらの授業において、基準を設けて、達成できない学生を不可としていることの是非、そして、音楽、図工、体育の実技3教科必修を、2教科選択必修に変えたことの是非について、上記学生にたずねて、体育実技科目に対する彼らの意識を検討することである。なお、昭和58年に入学した同課程の学生と、改正前年度の昭和53年同課程入学の学生に対しても同目的の調査を行い、比較対照して考察した。

また、小学校で教える8教科についての意識も、体育の位置づけを調べる意味で、調査項目に加えた。この調査項目についても、注目すべきデータが得られたので報告する。

〈方 法〉

主な調査対象は、昭和54年入学の小学校課程の学生である。調査項目は、小学校で教える8教科について、その重要度、自分が好きかどうか、教え易いかどうか、を5段階評価でたずねたもの、実技科目の受講状況調査、実技3教科必修の是非、小学専門体育の授業で合格基準を設定することの是非をたずねたもの、教育学部志望理由の実態調査よりなる。

これと比較対照するため、改正前の最終学年である昭和53年入学の小学校課程の学生に、体育実技科目の必修、合格基準制度の是非をたずねた面接調査を行い、昭和58年入学の小学校課程の学生に対しても、上記調査の一部分についての質問紙法による調査を行った。後者は、主な対象者である昭和54年入学生の意識に、2年半の大学での教育の影響があるかどうかを検討するために行った。

昭和54年入学生については、3年後期初めに、体育教材研究の授業中に、昭和58年入学生については、1年前期、5月初旬に、教養部の体育実技の授業中に用紙を配布し調査した。

昭和53年入学生については、4年後期に、同学年の保健体育科教室の所属の学生を使って面接調査を行った。そのためサンプル数が在籍人数の $\frac{1}{3}$ 弱にしか達しなかった。

具体的な調査項目は、結果のところで記述する。

調査人数は、昭和53年入学生、男子25人、女子32人、昭和54年入学生、男子51人、女子76人、昭和58年入学生、男子75人、女子95人である。定員は、この間170人で変化していない。

〈結 果〉

1. 昭和54年入学について

(1) 学生のプロフィール（図1）

昭和54年入学生（54年生）は、男子の80%、女子の86%が現役であり、本学校教育学部を第1志望の者は、男子49%、女子60%であった。第1志望でない学生についての調査では、本学他学部、他大学教育学部、他大学他学部が男女ともほぼ $\frac{1}{3}$ ずつであった。

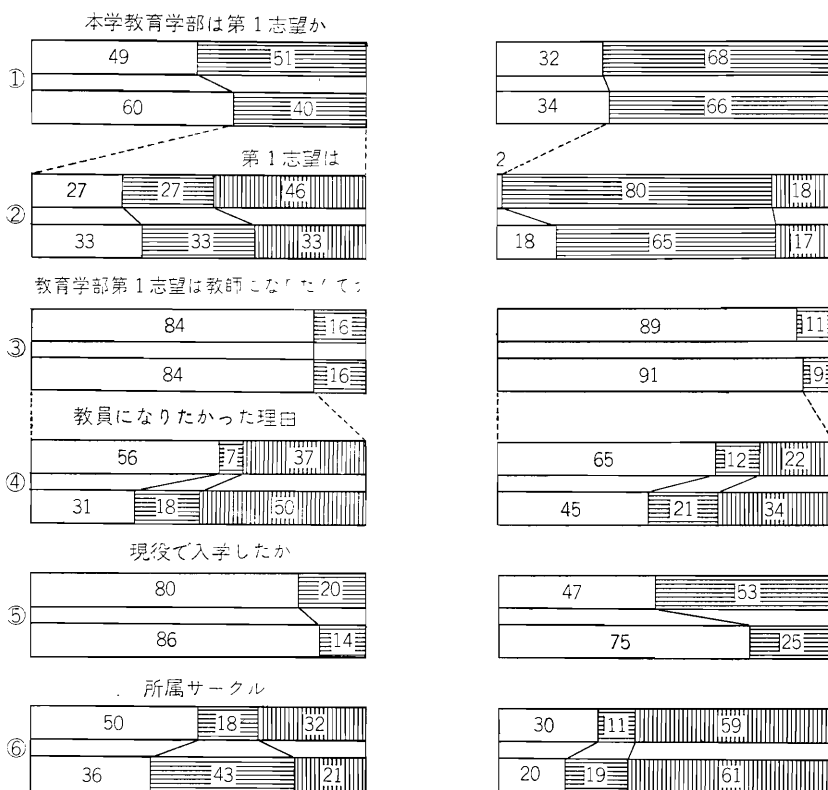


図1 昭和54年入学生（左）と昭和58年入学生（右）のプロフィール

（上段が男，下段が女。単位は％。二者択一の白抜きは「はい」，横縞は「いいえ」；②の白抜きは「本学他学部」，横縞は「他大学教育学部」，縦縞は「他大学他学部」；④の白抜きは「どうしてもなりたかった」，横縞は「なりたかったが，労働条件のよい方が主な理由」，縦縞は「何となく」）

本学，他大学を含め，教育学部志望者の8割以上は，男女とも教員志望であり，その理由をみると，どうしても教員になりたかったという意見は，男子56％，女子29％で，男女差が認められた。また，女子においては，男女平等，休みが多い等，教員に有利な労働条件を最も考慮したという者が，男子より1割が多かった。

さらに，所属クラブをみると，女子に文化部所属の者が多く，男子は運動部所属の者が半数であった。

(2) 小学校課程の実技教科について

音楽・図工・体育の実技3教科の実技科目をすべて受講している学生に難易度をたずねたところ，男子の6割は，音楽が最も難しいと答えたのに対して，女子では，4割に止まり，図工，体育と答えた者も3割程度であった。また，途中放棄しそうな教科があるか，という問いについては，5割近くが，ない，と答えており，それ以外の回答は3教科にほぼ等しく分布していた(図2)。

調査時点で，実技3教科すべて2単位以上受講していた者は，男女とも80％であり，受講していない者の主な理由は，別の必修とぶつかっている(男子29％，女子33％)，および，その科目が得意でない(男子29％，女子44％)であった。

3教科必修の是非をみると，女子は男子の2倍以上の58％が，3教科必修に賛成している(図2)。

次に，体育の実技についてみると，小専体育Ⅰは，男女共9割以上，同Ⅱも8割以上が受講した。しかし，小専体育Ⅰの単位を取得した者は，男子の5割強，女子の8割であった。これは，主として器械運動のテストに合格しないためである。しかし，彼らのほとんどは，卒業までに合格基準に達し，単位を修得している。未修得の者に，あきらめるか，と聞いたところ，この調査時点で，女子の約1/5(5名)が，あきらめると答

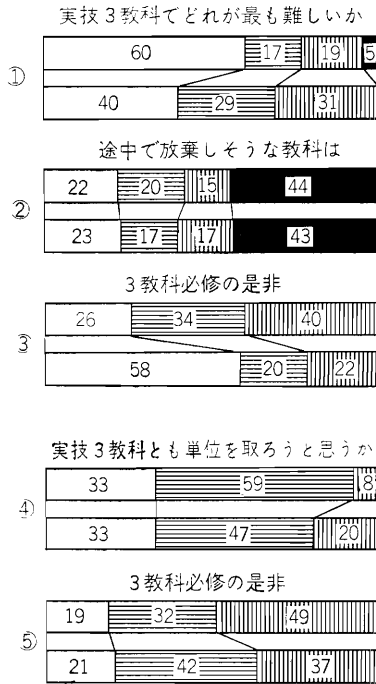


図2 昭和54年入学生(上3つ)と昭和58年入学生(下2つ)の実技3教科についての意識調査
 (①と②の白抜きは「音楽」、横縞は「図工」、縦縞は「体育」、黒ぬりは「なし」; ③と⑤の白抜きは「教員養成機関だから3教科がよい」、横縞は「大多数が3教科履習するから必修は2教科でよい」、縦縞は「不得意な教科を無理に受講させる必要はないから2教科でよい」; ④の白抜きは「小学校の先生に必要だから3教科とる」、横縞は「3教科履習するつもりだが、1つは放棄するかもしれない」、縦縞は「不得意な教科があるので2教科しかとらない」)

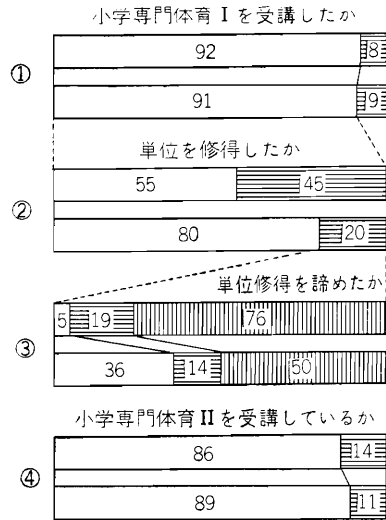


図3 昭和54年入学生の小学専門体育に関する実態調査
 (③の横縞は「決めていない」、縦縞は「あきらめない」)

えており、男子では、あきらめると答えた者は、1名にすぎなかった(図3)。

体育実技科目で、基準を設けて、その基準に達しないと不可にすることを是非を回答させたところ、基準を設けることについては、不必要と答えた者は、男女とも1割に満たず、おおむね了承されていると考えられる。しかし、不可にすることに対しては、男子では3割、女子では5割しか賛成していない。この割合が高いか低いかは、判断が難しいが、男子より女子に賛成者が多いことは、確かである。これは、熱心に練習したかどうかにかかわらず「はい」と答えた者が、女子の方が25%も多いこと、そして、基準がなくても、同程度に熱心にやったか、という問いに「はい」と答えた者が、男子より1割少ないことと関連すると思われる(図4)。

(3) 8教科に関する意識について

8教科の重要度、好み、教え易さについての5段階評価を、5~1として、全回答者の平均点を算出し、各観点の測度とした。それを図示したのが図5である。

これを見ると、重要度では、国語・算数が第1グループ、理科・社会・体育が第2グループ、家庭・音楽・図工が第3グループという傾向がみられる。

次に、好みでは、かなり男女差がみられ、男子は、体育が第1位であり、女子は国語が第1位である。また、家庭は、男子では第8位、女子では第2位である。この図から、女子は、国語が特に好きな他はふつうであるのに対して、男子では、体育が特に好きで、音楽と家庭が特に嫌いである、とおおまかに把握できる

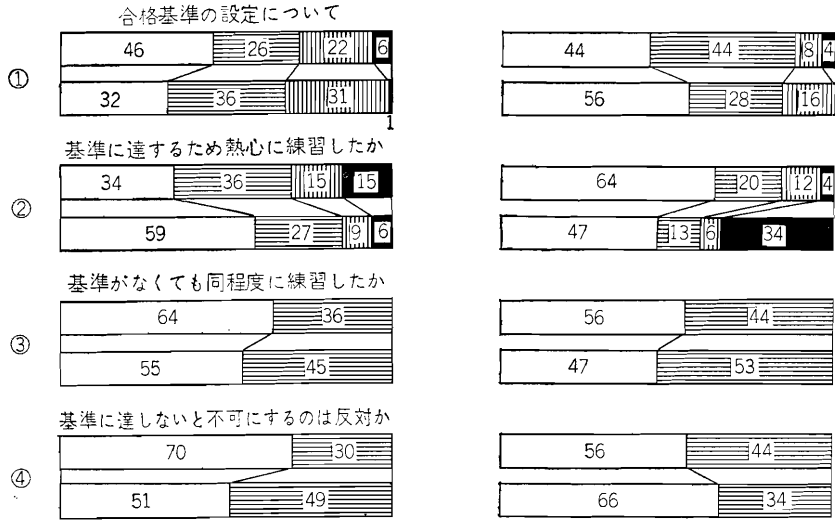


図4 昭和54年入学生(左)と昭和53年入学生(右)の小学専門体育の合格基準についての意識調査 (①の白抜きは「授業だから当然」、横縞は「目安としてある方がよい」、縦縞は「設ける種目と設けない種目があってよい」、黒ぬりは「不必要」; ②の白抜きは「した」、横縞は「ふつうにやった」、縦縞は「あまり熱心にやらなかった」、黒ぬりは「基準に達しない種目なし」)

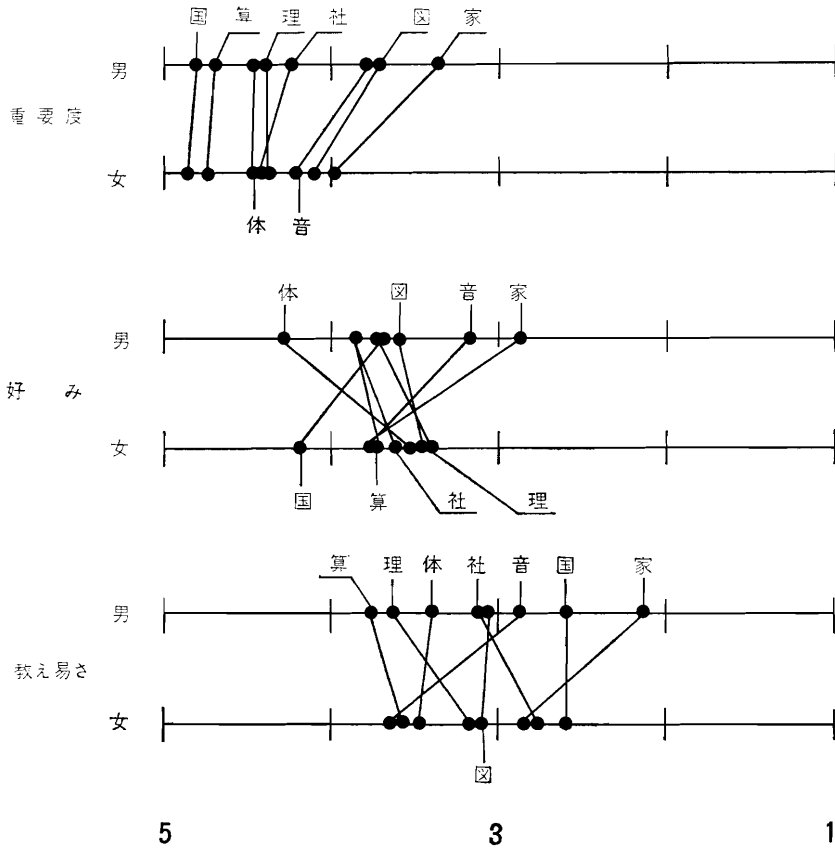


図5 昭和54年入学生の8教科の評価平均値 (重要度は「非常に重要である……あまり重要でない」、好みは「好き……嫌い」、教え易さは「教えやすい……教えるにくい」の5段階評価)

と思われる。

教え易さでは、男女とも算数と体育が高く評価されており、国語が低く評価されている。また、女子は、音楽を教え易いと思う者が多い傾向にあり、男子は、理科を教えやすく思い、家庭を教えにくく思う傾向にある。

2. 昭和58年入学生について

昭和58年入学生（58年生）については、54年生と異なる点のみ以下に記す。

(1) 学生のプロフィール（図1）

58年生について、女子は、現役が75%であり、54年生と大差ないが、男子の53%は浪人であり、54年生と大きな違いがあった。

本学教育学部を第1志望とする者は、男女とも1/3にすぎず、第1志望でない者のうち過半数は、他大学の教育学部であり、54年生に比べて、教育学部志望者が大幅に増加している。教育学部第1志望の9割は教員志望であり、この点では、54年生とほぼ同じである。しかし、何となく教員になりたいと思った、と答える者は少なくなり、どうしても教員になりたくて教育学部を志望した者の割合が、54年生よりも増加している。

現時点で、どうしても教員になりたい、と考えている者は、男子の73%、女子の74%である（図なし）。

男子は運動部、女子は文化部に所属している者が多く、この点も54年生と同じであるが、どこにも所属していない学生が、男女とも過半数である。

(2) 小学校課程の実技教科について

音楽・図工・体育の実技科目について、あらかじめ、3教科必修から、2教科選択必修になったことを説明し、3教科必修の是非を54年生に同様にたずねたところ、3教科必修に賛成の者は、男女とも全体の2割

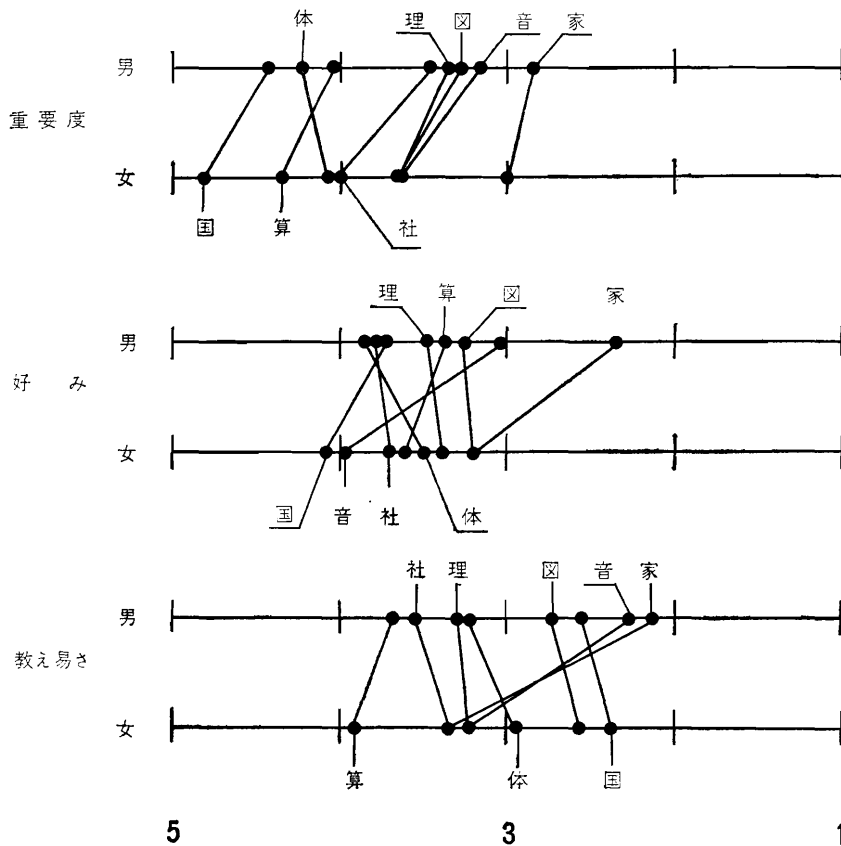


図6 昭和58年入学生の8教科の評価平均値

にすぎなかった(図2)。

(3) 8教科に関する意識について

重要度に関しては、54年生と大差ない結果であった。しかし、好みと、教え易さについては、54年生との間に、若干の相違がみられた(図6)。好みにおいては、男子で国語と算数、理科と社会の順位が入れかわり、いわゆる、文科、理科に分けた場合の文科的傾向が強まったと考えられる。女子にあっては、もともと文科的傾向にあり、算数より国語、理科より社会の方が好きな傾向にあったが、58年生は、男女とも国語と社会が、算数と理科より好きな傾向であった。さらに、58年生の女子は、家庭がもっとも嫌いであり、54年生では、2番目に好きであったことと比較するとかなり異った結果と言える。

音楽・図工・体育について教え易さをみると、音楽は、男女とも54年生の方が順位が低いが、図工・体育をみると、男子の図工が同順位であった他は、54年生の方が順位が高くなっている。

3. 昭和53年入学生について

昭和53年入学生(53年生)については、3教科必修の是非と、体育の実技科目についての意見のみを回答させた。

小専体育ⅠとⅡは(この学年は必修)男子の64%、女子の91%が3年終了時に単位を修得しており、54年生と同様、女子の方が高い修得率となっていた(図7)。

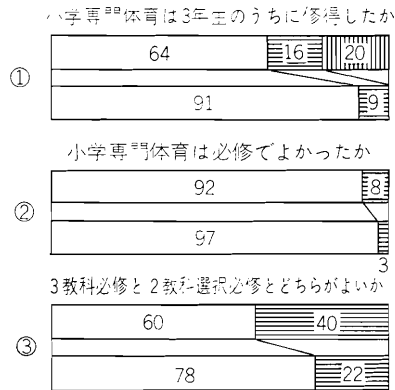


図7 昭和53年入学生の小学専門体育・3教科必修に関する設問
(①の横縞は「今は修得している」、縦縞は「まだ修得していない」; ③の白抜きは「3教科」、横縞は「2教科」)

小専体育の必修については、男女とも90%以上、実技3教科2単位必修についても、6割以上の学生が賛成している(図7)。しかし、小専体育で、合格基準に達しない学生を、不可にすることについては、男子の半数弱、女子の1/3しか賛成していない(図4)。各種目に基準を設けることに反対の少ないこと、基準がなくとも同程度熱心に行ったであろう、と答えた者の割合が、女子の方が1割少ないことは、54年生と同じであったが、実際、熱心に練習したかという問いに対して、基準に達しない種目はなかった、という回答が女子で1/3にも達し、この点は、54年生と異っていた。

<考察>

1. 教育学部志望の動機

本学教育学部を第1志望とする者は、54年生については、ほぼ半数であったが、58年生については1/3にすぎなかった。また、他大学を第1志望としながら本学教育学部に入学した学生のうち、他大学の教育学部を第1志望とする者は、54年生では1/3にすぎなかった。しかし58年生では、男子の80%、女子の65%が他大学の教育学部を第一志望としている。この点から、58年生の方が教育学部第1志望の者が多いと言える。この傾向は男子で特に顕著であり、本学他学部を第1志望としながら教育学部に入学した学生が、54年生では14%であったのに対して、58年生では1%にすぎなかった。これからも、54年生から58年生にかけて、教育学

部志望者が教育学部へ、という好ましい傾向が生じていると考えられる。

この理由として、54年生が共通一次の第1期であり、58年生は共通一次の成績による序列化がかなり明確になった段階にあることの影響が考えられる。一般的には、共通一次により大学の序列化が進み、入りたい大学よりも入れる大学に、という好ましくない傾向が生じている、と言われている。このことを考えてみると、少なくとも、教育学部志望者が教育学部に集中するという意味では、58年生の傾向はむしろ好ましいことである。しかし、本学教育学部を第1志望とする者が少なくなったということに関しては、全国の教育学部間の共通一次成績による序列化が進行し、本来、本学教育学部を第1志望と考えるべき学生が、序列の上位校を第1志望と考えるようになり、共通一次の成績、あるいは経済的理由（本県出身の学生の場合）で、本学教育学部への入学を余儀なくされたと考えられるべきかもしれない。共通一次の実施により、今まで大学単位で漠然と序列化されていたものが、各学部ごとに第1位から最下位までかなり明確に序列化され、自分の志望学部内での選択が可能になったことが、教育学部志望者の増加と本学部第一志望者の減少に結びついていると推論される。しかし、この推論は、他学部のデータや本学部の継続的データによる裏付けを必要とするであろう。

次に教育学部志望の動機は、教員になりたいという理由が両学年とも大多数を占め、教育学部が教員養成の機関である特殊性を示している。さらに、教員志望の動機は、58年生において何となくという理由が減り、どうしても教員になりたかったと答えた者が男女とも1割がた増した他は、両学年とも同じ傾向であった。男子よりも女子に、労働条件の方に大きなウェイトを置いたと答えた者が多かったことは、教員が公務員と並んで数少ない男女平等の職場であると考えられるためだと思われる。

54年生については、豊嶋⁰³が4年生の時にかなり詳しい教職志望に関する意識調査を行っている。それによると、入学時に教職志望が強かった者は小・中学校課程あわせて、全体の7割であった。本調査では、第1志望が教育学部でなかった者は調査から除いてあるので直接比較はできないが、同じ調査対象を用いているので、教育学部が第1志望でない者も、入学の時点ではかなりの割合で教員になろうと思っていたと思われる。豊嶋の調査では、志望動機において労働条件等の理由をあげる者の割合に男女差がない、と報告されているが、この調査は自由記述と無制限選択法で行っており、調査方法の違いによるものと思われる。

山本⁰⁷も、和歌山大学の教育学部の学生について、豊嶋と同様、入学者全員について調査し、昭和54年から57年までの間、志望理由の第1位に「教員になるため」⁽⁵⁾をあげる学生が、常に6割以上であることを報告しており、本学の割合とほぼ似ていた。また伊藤⁽⁵⁾は、静岡大学の教育学部について51.3%という数字を報告している。

2. 音楽・図工・体育の3教科の実技について

実技3教科の中で最も難しいものは、男女とも音楽であった。特に男子は6割が音楽を最も難しい教科としており、これが、後に考察する8教科の好み、教え易さの回答傾向の男女差に反映していると思われる。しかし、途中で放棄するかも知れない教科については、3教科ともほぼ同じ回答率であった。音楽が最も難しいにもかかわらず、放棄する気持ちがそれほどでもないのは、必修である音楽教材研究との絡みが考えられる。音楽教材研究で要求されるピアノの技術が小学専門音楽（音楽の実技教科の名称）と同等であるため、教材研究に合格するだけの技術がある者は、小学専門音楽の単位の修得も容易であり、単位修得の困難な者は修得できるほどに上達しないと必修の教材研究の単位が危くなるという実状にあるためと考えられる。また、1年次に履習できる科目があることも理由の1つかも知れない。

次に、3教科必修の是非についての回答を考察する。この設問は、調査対象とした3学年の学生すべてに回答を求めている。主な対象である54年生についてみると、女子において、3教科必修の方が良いと答える者が過半数を占めている。学生の立場からみると必修は少なければ少ないほどよい、ということになると考えられるが、過半数が必修を増した方がよいと答えたことは、小学校教員にとって実技教科が重要であるという認識によるものと思われる。ところが、58年生についてみると、男女とも、3教科必修を支持する者は2割にすぎない。前述したように、58年生の方が教育学部第1志望の者が多いことを考えると、58年生の方が教員養成学部の使命に関していいかげんであるとは考えられず、2年半の大学教育の影響で、実技の大切さを認識してきたと考えるべきであろう。53年生についてみると、3教科必修の賛成者は、男子で60%、女

子では78%の高率であった。53年生については、回答を3教科必修がよいか、2教科選択必修がよいかという二者択一で求めており、この設定が賛成の回答を多くしたものであると思われる。つまり54年生の選択肢にあるように、大部分が3教科をとるので、必修は2教科でよい、と考えている者が、二者択一で回答を求められた時、3教科必修に賛成した可能性がある。54年生で上記の回答をした者も、3教科とも取ることが望ましいという点では、3教科を必修にすべきだと回答した者と同意見である。この点はともかく、単に2教科でよいという意見は、53年生も男子の4割、女子の2割しかない。53、4年生は、大学での教育によって、実技教科の大切さの認識を深めたと考えるのが妥当であろう。そして、その影響は女子で特に大きかった。しかし、53、4年生の間では、完全に同じ設問ではなく、また53年生のサンプル数が少ないことから、3教科必修制度の学生（53年生）と2教科選択必修制度の学生（54年生）の意識の差は明確にできなかった。ただし、54年生も大多数が3教科の実技単位を履習していることを考えると、大きな差はないのではないと思われる。

⁽²⁾ 麓は、中・高年令層の男女の運動経験が健康意識に与える影響を調査し、男子より女子に意識変革が顕著であることを報告しており、実技体験が女子に大きい影響を与えるという意味では同様の結果と考えてよいだろう。しかし上述の報告では、女子の未熟な健康意識が男子並みになったという一面が指摘されており、本調査の54年生女子と58年生女子の意識の差を説明する要因については、58年生の継続的調査を待ってさらに考察する必要がある。

クロス集計を行ってみると、54年生については、男子では教育学部が第1志望でなかった者に必修賛成者がやや少なく、女子では現役入学者に賛成者がやや多いという傾向がみられた(表1)。58年生では、教員志望かどうか、その理由、教育学部が第1志望かどうか等による差が認められなかった。

表1 3教科必修の是非を中心としたクロス集計
(左が昭和54年入学生、右は上2つが昭和58年入学生、下が昭和53年入学生)

	3教科	実質3教科	2教科			
現役	10 (40)	12 (12)	15 (13)	7 (14)	12 (31)	16 (26)
浪人	3 (4)	4 (3)	3 (4)	7 (6)	12 (9)	20 (9)
教育学部第1志望	10 (30)	10 (13)	12 (12)	12 (16)	19 (33)	32 (25)
その他	3 (9)	7 (5)	7 (6)	2 (4)	4 (8)	4 (11)
小専体育不可反対	7 (18)	13 (10)	14 (11)	3教科 2教科		
〃 賛成	6 (26)	3 (5)	5 (6)	9 (15)	5 (6)	
				6 (10)	5 (1)	

(男子実数表示、括弧内は女子)

3. 小学専門体育の授業について

実技3教科中、2教科選択必修であるので、学生が2教科しか選択しないとすると、各教科67%が平均受講率となる。小専体育Ⅰの履習率は、男女とも90%を越えた。また受講者のかかなりの割合が、単位認定されていないにもかかわらず、小専体育Ⅱの受講率はそれ程減少していない。小専体育Ⅱを修得しても、同Ⅰを修得できなければ実技の選択必修の教科としては認められない。したがって、効率的に卒業に必要な単位を取ろうとすれば、この単位を放棄して、実技は音楽と図工、というように考える学生がいてもよいはずである。男子が6%減少しているが、その中には4年生で単位を取ろうとしている者もいる。したがって、最終的には何人が卒業時に小専体育の単位を修得していたかも問題となる。

そこで、54年生が正規の修了年限で卒業した昭和58年3月の時点で実技3教科の単位をどのように修得していたかを、学籍簿から調査したところ、3教科とも4単位以上修得した者は、全体の45%であった。4単位というのは本学部小学校課程の「6教科、4単位以上選択必修」の規定の1教科とするために必要な単位

数である。体育の場合、計6単位分毎年開講しているが、教科として選択するためには、実技2単位をとらねばならず、講義だけ4単位の者は統計に含めなかった。以前の履習規定にある3教科とも実技単位2単位以上を修得した学生は、全体の62%であり、約%の学生が、以前の規定でも卒業できるだけの単位数を満していることがわかる。さらに履習届を出して授業に出席しながら、合格基準に達せず、再テストを放棄して、小専体育の未修得者が26名もいる。彼らも必修であれば再テストを受けたと思われ、それを加えると、結果でも述べた3年次の受講率と同じ8割の者は旧規定の履習を満たしていることになる。また、音楽や図工を途中で放棄した者もいることを考えあわせると、卒業までに、さらに多くの学生が3教科の実技を受講したことになろう。その意味では、3教科必修について、実際には大多数が3教科とるので、2教科選択必修でよい、という回答は現実的であると言える。

次に、成績簿から小専体育についてみると、小専体育Ⅰを履習しないで、今年3月卒業した者は、男子では3名、同Ⅱでは2名にすぎず、最終的にⅠを修得できない者も全員、小専体育Ⅱの履習届を提出し受講していた。一方、女子においては、小専体育Ⅰ、Ⅱともそれぞれ9名が非履習のまま卒業している。このうちⅠ、Ⅱの両方とも非履習者は、そのうちの8名であり、小専体育Ⅱのみを非履習の1名は同Ⅰを途中で放棄した者であった。つまり、これらの10名ほどは体育が嫌いでやりたくない、という学生と思われる。彼らに、在学中に体育の実技を経験させるためには、体育を必修にする必要がある。

58年生に実技3教科の受講意志をたずねた調査でも、まずは3教科とも取るという学生が大半であり(図2)、3教科必修にしなくとも、多くの学生が実技教科を履習して卒業すると思われる。しかし、不得意教科は受けない、と決めている学生に、実技教科の履習をうながすには、必修教科を増やすことが必要と思われる。

次に、実技の合格基準を設定し、それに達しないと不可にすることについての意見について考察する。この回答は、53年生、54年生に同じ設問で回答を求めている。基準設定自体を不必要とする学生は、両学年とも少ない。しかし、合格基準に達しないと不可にすることについては、半数以上が反対している。54年生については、女子のほぼ半数は不可とすることに賛成しており、これは男子より多く、3教科必修に賛成する者が女子に多いという結果と一致する。しかし、53年生は、3教科必修について、女子に賛成者が多いにもかかわらず、不可に賛成する者は女子の方が少ない。これは53年生のサンプル数が少なく、ある程度かたよったサンプリングになったためかも知れない。事実、基準に達するための練習について、基準に達しない種目はなかったと答えた者が他の群と比較して多かった。53年生の結果はやや割り引いて考える必要があろう。しかし、小専体育が必修でよかったかについて、男女とも9割以上が、よかったと答えていることは特筆に値するであろう。

クロス集計を行ってみると、54年生で3教科必修に積極的に賛成する者は、小専体育で不可にすることに賛否半ばであるが、他の回答をする者では、不可に反対の者が多い(表1)。53年生の女子も同様である。また、教育学部が第1志望であったかどうかは、3教科必修に関する回答と異なり、不可に対しての回答傾向に影響しなかった。つまり、3教科必修については、ある程度理解を示すか、努力すればできるにもかかわらず、合格基準に達しないと不可にすることには抵抗がある、というのが全体像のようである。

4. 小学校の8教科についての意識

小学校教員が各教科に対して、どのような意識を持っているかは、教員の実態を把握し、研修計画を作成するためにも、教育行政上で基礎的な資料となると思われるが、そのような実態調査は、なかなか行われないうのである。国立教育研究所紀要をみても、教員養成カリキュラムの実態調査は行われているが、教員の意識については、新任教諭に教科に対する希望を調査した程度のものしかない。教員が不得意と感じている教科について数多くの研修カリキュラムを組むのが教育委員会の使命であり、学生にとって不得意と思われる教科の必修単位を増加させて、立派な教員を送り出すのが、教育学部の使命であると考えられるが、その基礎となるべき教科に対する意識調査は、ほとんど行われていないようである。一つは、教科間の比較が容易でなくたとえある教科が多くの教員に教え易いと評価されても、それが本当に易しいから大学で教える時間を減してもよいものかどうかの判断がつけにくい、というのが理由になっているのであろう。また、教科間を比較したり、格差をつけることへの無意識の反発もあるのかも知れない。

本研究においては、小学校教員養成機関の学生について、2学年にわたり調査した。その結果、いくつかの共通点と相違点を得た。この2学年に共通な傾向は、おおむね小学校教員養成課程の学生に共通するものと考えてよいであろう。重要度において、国語と算数が第1グループ、理科、社会、体育が第2グループ、その他が第3グループである。好みにおいては、音楽と家庭が女子の方がより好んでいること、教えやすさも好みと同様であること、算数が教えやすく、国語が教えにくいこと、男子は体育が好きであり、女子では国語が最も好きであること等である。

8教科の意識調査は、伊藤⁶⁾が対比較法を用いて、小学校教員養成課程の学生に対して、興味度と難易度を調査したものがあつた。しかし、これは男女別の集計をしておらず、興味度は、教えるのが好きか、と質問しており、直接の比較はできない。男女の回答傾向に差があるので、男女合計して算出した尺度は、あまり意味がないと思われるが、他に比較データが見当らなかったのでは比較してみると、難易度について本調査で、男女とも難かしいと評価している国語が、伊藤の調査でも、もっとも高い(難しい)値を示している。男女とも易しいと評価している算数は、伊藤の調査では、下から4番目であり、中頃である。しかし、主要4教科の中では、最も易しく評価されている。この調査では、主要4教科の尺度値が高い方にかたまっていて、体育が最も教え易い教科になっている。調査方法の相違も影響しているのかもしれない。

体育は、好みと教え易さにおいて、男子の方が女子より高い評価をしている。東京都の小学校教員を対象とした調査でも、他の教科と比較して体育は教えにくいと答えた者が、女子では男子の2倍以上にのぼっていた。また、女教師は教えにくい理由として、運動技術に自信がない、指導法がわからない、をあげる者がそれぞれ2割ほどいた。これらは、男教師が全くとりあげなかった理由である。この点、体育実技を経験したことにより、本学の女子学生の場合、女教師に特有の欠点を是正でき、その体験が、女子学生の意識をめぐらせた、と考えることもできよう。これが、前述したように、3教科必修について女子に積極的賛成者が多い理由かも知れない。

次に、54年生と58年生の相違について考察する。この両学年は、54年生が入学者数の73.8%、58年生が99.4%の学生から回答を得ており、本調査の結果は、学年の全体像と考えてよいであろう。両学年の差は、入学年の相違と、2年半の大学での体験の有無とによって生じていると解釈される。しかし、8教科の重要度の評価にあまり差がないことから考えると、両学生の差で特に顕著なものは、大学での経験の差を反映していると考えべきだと思われる。

主要4教科の好みについてみると、58年生は、男女とも国語・社会を算数・理科より好んでいる。これは、二次試験に国語のみを課しているため、いわゆる文科系に有利な状況があるためと推察される。事実、筆者らが北海道・東北以外の遠方の県からの最近の入学生に、志望理由をたずねたところ、遠くへ行きなかったという回答の他は、共通一次に失敗して、第1志望に入れず、数学が苦手であったので、本学を選んだという回答であった。共通一次元年の54年生はともかく、前述した志望学部別の序列化という現象が、少なくとも教育学部については、進行しているように思われる。

次に、54年生と58年生の意識の相違をより明確にするため、両学年の平均評価点の差を図8に示した。重要度はすべてプラスであり、54年生の方が58年生よりも全体的に重要度を高く評価する傾向がある。男子の理科、女子の家庭は、評価が1以上も違っている。女子の家庭は、相対的な評価順位でも2位(54年生)と8位(58年生)と異っており、大学での教育内容により、重要度が高まったと考えるのが妥当である。そうすると、高校までの家庭科の教育内容が問題となろう。一方、理科については、女子でも重要度で2番目に差の大きい教科であり、二次試験の影響で理科系に弱い学生が多くなったことも、一つの要因と考えられる。

好みについては、男女とも家庭が54年生により好ましく思われている傾向がある他は、大きな変化はないようである。ところが、教え易さは、大学での教育をうけているはずの54年生の3年次の調査の方が教えにくい、と答える者の多い教科があり、男女とも社会科でその差が大である。女子では、主要4教科のうち国語以外は教え易さの評価が低下し、より教えにくいと考える傾向になっている。一方、音楽・図工・体育の教科についてみると、図工と体育は、男女とも54年生の方が教え易いという評価になっているのに対して、音楽では正反対であった。

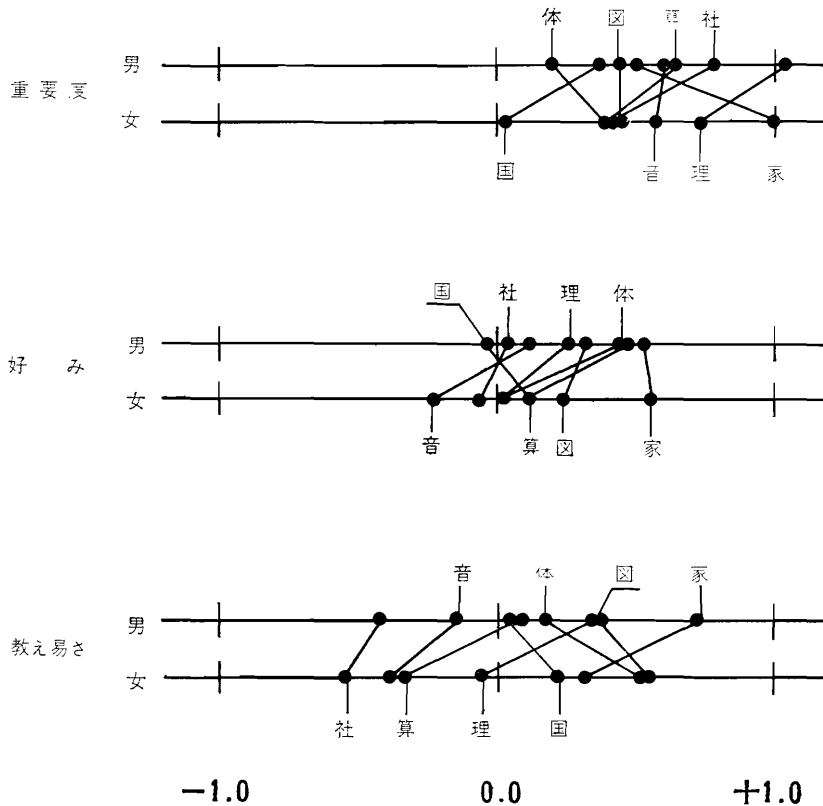


図8 昭和54年入学生と昭和58年入学生の評価平均値の差
(プラスは54年生の方が大きいことを示す)

次に、体育の評価を中心に、各設問とのクロス集計を行って、体育の評価と、他の設問に対する回答傾向を考察する。以下の考察は5段階評価を3段階評価(1と2, 4と5を合計)に直してクロス集計したデータに基づく(表2)。

54年生を中心として、教科としての体育の意識をみると、男女とも好きだと思っている学生に教え易いと思っている者が多い傾向である。これは58年生も同様である。

次に、3教科必修の是非、基準未達成者を不可にすることの是非に対する意見との関連をみると、男子については、必修の是非とあまり関連がないようであったが、女子では体育を重要と思っている者、好きだと感じている者に、必修賛成の割合が大きい。58年生は、女子で体育を重要、好きと思わない者は全員必修に反対であった。

一方、不可にすることについては、男子をみると、3観点の評価とも5または4と答えた者、つまり重要だと思っている者、好きだと感じている者、教え易いと思っている者以外では不可に賛成する者はほとんどいない。女子では上記の意識と不可の是非は、ほとんど関係ないようである。授業内容よりも単位修得に目が行く傾向が男子に強いと言えよう。

次に、基準がなくとも同程度熱心に練習したか、についてみると、男女とも体育を重要だと思っている者に「はい」の答えが多い傾向であった。また小専体育Ⅰの修得については、体育を好きだと思っていない者に未修得の割合が高かった。

教育学部を第1志望としていたか、教員志望の理由がどうであったか等は、体育や実技3教科についての意識や修得状態と直接結びつかなかった。高校時代の考え方が、大学に入ってからにも影響することはあまり

表2 教科としての体育の評価を中心としたクロス集計
上3つは左が昭和54年入学生、右が昭和58年入学生。その他は昭和54年入学生
教え易さ

		5・4	3	2・1			5・4	3	2・1		
好 み		5・4	21 (22)	14 (12)	2 (5)		5・4	21 (12)	2 (7)		
		3	2 (2)	6 (17)	2 (7)		3 (5)	21 (24)	5 (11)		
		2・1	0 (4)	0 (3)	3 (4)		0 (0)	0 (3)	3 (4)		
3教科必修の是非											
重 要 度		5・4	11 (39)	14 (12)	16 (13)		8 (17)	17 (26)	25 (17)		
		3	2 (5)	2 (3)	3 (4)		6 (3)	7 (14)	9 (13)		
		2・1	0 (0)	0 (0)	0 (0)		0 (0)	0 (0)	2 (5)		
3教科必修の是非											
好 み		5・4	12 (27)	9 (4)	16 (13)		9 (14)	13 (24)	19 (17)		
		3	1 (12)	5 (9)	3 (5)		4 (6)	10 (15)	14 (12)		
		2・1	0 (5)	3 (0)	0 (4)		1 (0)	1 (0)	3 (6)		
小専体育不可について											
重 要 度		不可反対	不可賛成	好 み		不可反対	不可賛成	教 え 易 さ		不可反対	不可賛成
		27 (32)	13 (32)			25 (18)	12 (21)			12 (15)	11 (13)
		7 (7)	1 (5)			8 (15)	1 (11)			17 (13)	2 (17)
		0 (0)	0 (0)			2 (6)	1 (5)			6 (11)	1 (5)
基準がなくとも同程度に練習したか											
重 要 度		はい	いいえ			はい	いいえ				
		28 (36)	10 (25)			23 (32)	12 (6)				
		2 (3)	5 (7)			2 (19)	6 (3)				
		0 (0)	0 (0)			0 (2)	3 (4)				
小専体育1を修得したか											
好 み		はい	いいえ			はい	いいえ				
		23 (32)	12 (6)			2 (19)	6 (3)				
		2 (19)	6 (3)			0 (2)	3 (4)				
		0 (2)	3 (4)								

ないと考えてよいだろう。あるいは、教員養成学部を最終的に選択したということで共通する学生の意識が解答傾向に大きく影響しているのかも知れない。

5. 音楽・図工・体育の実技単位の必修について

小学校教諭の場合、6つの教科についての専門科目を2単位以上含み、16単位を修得すれば1級普通免許状がもらえることになっている。つまり、ある教科を大学で専門科目として全く修得しない状態でもよいということである。ところが、小学校教諭は教科担任制ではないので、全教科を教える必要がある。この矛盾は、基礎資格とされている、大学を卒業して学士の称号を有すること、という基準に照らして考えれば一応納得できる。つまり、大学生活を通して得た教養がある人は、教え方さえ修得していれば(教材研究は全教科必修であるので)自分で勉強することにより小学生を教えられるだろうという判断とみることができる。小学校で教える範囲全体の深い知識を大学在学中に得ることは不可能であるので、この考えは妥当と思われる。しかし、実技教科の場合、もちろん、教えることすべてを自分がうまくこなせる必要はないであろうが、ある程度の実技経験がないと教えることさえ理解できないであろうし、その時になって書物から教えを受けようとしてもままならない。体育学の分野での研究によると、頭にイメージを浮べて行うメンタルプラクテ

ィスと呼ばれる練習は、技術が初歩の段階ではあまり効果がないと言われている。本を見てそれだけで技術をマスターすることはできない。動作を繰り返して反復する必要がある。言語指示を行う時も用いた言葉の内容は、経験を通して概念化されるのであり、指導書にある指示をオーム返しに生徒に言葉で伝達すれば済むという問題ではない。つまり絶対的に経験が必要なわけである。教員になってからでもある程度の経験を積めるわけであるが、大学時代に実技を経験しておくことは必要である。本学の場合、大多数の学生はすべての実技教科について履習しており、その意味ではあまり必修でしぼり過ぎないためにも必修にする必要はないかも知れない。しかし、前に述べたように、はじめから不得意だからということを理由として受講しようとしないう学生も何人かおり、彼らも大学を出て小学校の先生になることを考えると3教科とも必修にすることも考えてよからう。

しかし、必修にして履習させるだけで、教員としての資質が向上するわけではない。1例として、小専体育の授業で経験したことを述べたい。それは、水泳の実習中にどうしても30m完泳できなかった学生について9月早々に再テストを行った時のことである。2人の女子学生だけが残っていたが、その時には、1回で2人とも合格した。30m泳げたわけである。その1人は、30mでダウンした後、「こんなはずはない、もう一度」と言って、合格したにもかかわらず、再度試みて50mを完泳した。もう1人は、プールから上がるなり、「ああ、しんどかった。もう泳がなくて済む」と言った。この年はまだ3教科必修であり、実習中も講習時間後まで残って練習し、それでも10mしか泳げなかった学生である。2人とも、必修でなければおそらく途中で放棄したと思われる。前者の学生のためには必修にした意味があったが、後者の学生にとっては泳げるようにする意味では必修にした意味があり、教育効果があったと客観的に判断されるが、教員としての資質を高め得たかという点では、必修にした効果がなかったのではないかと残念に思ったものだった。

つまり、教授内容とそれを受け入れる学生の姿勢にも問題があり、学生に対して、事前に、体育の教材としての意義を十分に納得させることが必要であると思われる。水泳の意義は、事前に十分すぎるほど教授されているので、この例の場合、必修にしたことにより、単位を落とせば留年、という心理的圧力が加わり、学生は、単なる技術の習得だけに目が向く状態になっていたと考えることもできる。必修にすることの是非は、このような点も考慮して慎重に議論を進める必要があろう。泳ぎの下手な指導者がむしろ、水泳でつまづく生徒の指導に適しているという意見もあるが、それは、自分のつまづきを積極的な練習で解決した経験を持ったことのある者、という限定がついている⁽⁵⁾。泳ぎに自信のない者でも、工夫しだいでは、良い授業ができないことはないが、泳げる方がより理想的であろう。

上に述べた問題点は、水泳に限らず、体育の実技指導とその指導者養成について考える場合に、必ず頭に入れておく必要がある。

さらに、沖縄県の小学校の現職教員にアンケート調査を行った浅野⁽¹⁾の報告によると、学生時代に学んでおけばよかった領域という質問に、音美体の実技と答えた者が、低学年担当教師の32.6%、高学年担当教師の29.6%にのぼり、第1位の回答率であった。同時に実施した、大学教育学部教員に小学校教員になる学生に大学でどのような力をつけさせるべきかについて質問した調査によると、「児童・子どもについての深い理解や、子どもと遊んだり、交わりあう能力」の48.8%について、「現場実践にかかわる指導能力」が22.0%であった。この2つの結果から必然的に、現場実践にかかわる指導能力のうちで最も低いと教師が感じているのが、いわゆる実技3教科であり、それを大学で十分教えるべきである、ということになろう。また、体育専科制についての検討もなされ、学級担任が体育の授業を行う利点も強調されている⁽¹¹⁾。しかし、現在、小学校においても専科制をより多くの教科でとり入れる動きもあり、小学校教育全体のあり方もからめて、慎重に議論を深める必要がある。日本教育大学協会の報告によると、実技3教科についての大学教育学部としての意見は、3教科必修にすべきだという意見と、1教科必修に削減すべきだという意見が相半ばしている⁽⁹⁾とのことであるが、後者の場合は、専科制の導入をあわせて考えるべきであろう。

〈要約〉

本学教育学部の小学校教員養成課程の学生、3学年を対象に、体育を主とした教科に対する意識調査を中心として質問紙による調査を行った(53年生は面接調査)。調査は、昭和53年入学生(53年生)は4年次に、

昭和54年入学生（54年生）は3年次に、昭和58年入学生（58年生）は入学1月後に行った。主な結果は、以下のとおりである。

- (1) 共通一次1期生（54年生）と比較し、5年目にあたる58年生の方が、本学に限らず、教育学部を第1志望としていた者の割合が高かった。
- (2) 58年生の方が54年生より浪人の割合が高かったが、それは、主として男子の浪人の割合の増加による。
- (3) 音楽・図画工作・体育のいわゆる実技3教科の必修の是非をたずねたところ、58年生と比較して実際にそれらの授業を経験した53年生と54年生に3教科とも必修にすべきだ、という意見が多く、女子でその傾向が顕著であった。
- (4) 53年生と54年生について体育の実技科目について質問したところ、各種目に達成基準を設けることについては大多数が賛成している。しかし、基準に達しない学生を不可にすることについては、反対が多くなる。特に男子の方が反対する割合が大きかった。
- (5) 53年生に、当該学年では必修であった体育の実技科目についてたずねたところ、必修でよかったと答えた者は男女とも9割を越えた。
- (6) 8教科について、その重要度、好み、教え易さを、54年生と58年生に対して5段階評価でたずねたところ、重要度については、評価の高い方から、国語・算数、理科・社会・体育、家庭・音楽・図画工作という3群に大別された。好みについては、54年生と58年生の間かなりの相違がみられたが、男子には体育が、女子には国語が最も好まれていることでは一致していた。国語・家庭・音楽は女子に、体育は男子により好まれていることも共通していた。教え易さについても学年差はみられたが、男女とも算数を教え易く思い、国語を教えにくいと思っている点では一致していた。また、家庭と音楽は女子の方がより教え易く思っている点も共通であった。
- (7) 両学年の評価平均値の差をみると、重要度、好みについては若干の例外はあるものの、54年生の方が評価値が高い傾向にあった。しかし、教え易さをみると、各教科についてある程度授業を受けている54年生の方が教えにくいと評価している科目がかなりあった。実技3教科についてみると、図画工作と体育は、54年生の方が教え易いと評価しているが、音楽については、実技の授業を受けて練習もしているはずの54年生の方が、入学したばかりの58年生よりも教えにくいと評価していた。

引用文献

- (1) 浅野 誠「小学校教員養成課程にふさわしい新専修設置をめぐる」昭和56年度日本教育大学協会第二部会研究会発表要旨, 96～101, 1982.
- (2) 麓 信義「中高年齢者の健康意識と運動・栄養指導による健康意識の変化〔Ⅱ〕運動・栄養指導による健康意識の変化」保健の科学, 21, 799～803, 1979.
- (3) 橋本昭二「泳げない教師の水泳指導」高田典衛（編）新体育科指導法事典, 511～512, 明治図書, 1979.
- (4) 花田敬一・竹村昭・藤善尚憲「スポーツマン的性格」不昧堂出版, 1968.
- (5) 伊藤 敬「教育実習と教職志向」昭和56年度日本教育大学協会第二部会研究会発表要旨, 36～42, 1981.
- (6) 伊藤俊彦「小学校教員志望学生と小学生の教科に対する興味・難易の比較」日本教科教育学会誌, 6—3, 15～20, 1981.
- (7) 北川幸夫・木庭修一・柴田義晴「教員養成大学学生の水泳に関する実態調査」東京体育学研究, 8, 65～71, 1981.
- (8) 小林芳文「子どもの遊び——その指導理論」光生館, 1977.
- (9) 教員養成制度委員会「小学校教員養成のための教育課程の改善等について」日本教育大学協会会報, 42, 37～126, 1981.
- (10) 宮下充正「子どものからだ」東京大学出版会, 1980.
- (11) 並木義夫「体育指導の専科制」高田典衛（編）新体育科指導法事典, 176～177, 明治図書, 1979.
- (12) Piaget, J. “La psychologie de l'intelligence” (ピアジェ「知能の心理学」波多野完治・渡沢武久訳, みすず書房, 1967).
- (13) 豊嶋秋彦「大学生の職業的社会的化(3)——教育学部4年生における教職志望の変遷との関連を中心として」北海道心理学会・東北心理学会第5回合同大会発表資料, 1983.
- (14) 宇土正彦「体育科教育と教師」松田岩男・宇土正彦（著）現代保健体育学大系10「体育科教育法」335～341, 1978.
- (15) 梅田利兵衛「水泳のつまづきをめぐる問題」学校体育, 33—9, 14～21, 1980.

- (16) Werner, P. H. & E. C. Burton "Learning through movement—teaching cognitive content through physical activity" The C. V. Mosky Company, 1979.
- (17) 山本健慈「教育学部入学者の実態と意識——和歌山大学新入生調査より」昭和57年度日本教育大学協会第二部会発表要旨, 96~101, 1982.
- (18) 矢野久英「子どもを動かすことの苦手な女教師への助言」体育科教育, 20-7, 48~49, 1972.
- (19) 吉田和信「京都教育大学の臨海水泳実習」野外運動科目の単位互換性に関する基礎的研究第2報, 5~31, 京都教育大学, 1983.